

令和 3 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般選抜後期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

小論文 国際教養学部

問題

現在日本で俳優として活躍しているイラン人のサヘル・ローズさん（2019年イ列ア・ミラ国際映画祭で最優秀主演女優賞）は、イラクとの戦争で孤児になった人でした。俳優の傍ら、虐待された子どもや、海外の貧しい子への支援を続けています。次の文章を読んで、サヘルさんのそうした活動へ駆（か）り立てるものは何かをまとめ、それに対するあなたの考えを600字以内で述べてください。

出会いは偶然だった。「私たちをもらってくれませんか」。イラン政府は1990年代、テレビで孤児たちの養子縁組を募集していた。80年に始まったイラクとの戦争は8年後に停戦合意。しかし戦禍の傷痕は深く、多くの幼子が親を失った。たまたまテレビを見た大学生フローラ・ジャスミンの目は孤児院の少女にくぎ付に。「小柄でかわいい。会ってみよう」。後の女優サヘル・ローズだった。

大学で心理学を専攻していたフローラは、医師や看護師らと戦場で救出活動ボランティアの経験があった。フローラと面会した7歳のサヘルは無邪気に「お母さん」と呼ぶ。「見つめられ、その『視線』から自分が生まれたような感覚」とサヘルは振り返る。面会を重ねた後、フローラはサヘルに語りかけた。

「私の子どもになる？」

フローラの両親は当初反対した。イランで養子縁組するには子どもを産めない手術が必要になる。「そこまでして、どうして私を」。サヘルの疑問が氷解したのは大人になってからだった。フローラは幼い時に育児放棄され、祖母に育てられた。サヘルは言う。「一番大切な時に親の愛情を受けていない。自分の境遇と重ね、私に孤独を味わわせたくなかったのでしょうか」

サヘルを養子にしたフローラは家庭教師のアルバイトで生計を立てていた。だが生活は苦しく、頼みの綱は日本で働く夫。93年8月、2人は混迷深まる国から日本へ旅立った。

新天地の生活もいばらの道に。3人は埼玉県のアパートで暮らしたが、次第に関係がぎくしゃくしてしまう。来日から3週間後の夜、フローラとサヘルは家出した。頼れる人はいない。向かった先は公園だった。滑り台下のコンクリート製土管が「寝室」。サヘルは朝、公園の水道で顔を洗ってから小学校へ。フローラは来日後から働き始めた化粧品瓶製造工場に出掛けた。夕方に公園で待ち合わせし、近くのスーパーに行く。賞味期限間近のパンの耳を買って空腹をしのいだ。学校側も異変に気づく。毎日、同じ洋服。どんどん汚れる。ある日、サヘルは校門で「給食のおばちゃん」に「大丈夫？」と声を掛けられた。フローラと一緒におばちゃんの家へ一時身を寄せる。2週間のホームレス生活は終わった。

その後、フローラは離婚。仕事を変え、2人はアパートを転々とした。唯一の楽しみはスーパーのフードコートで、しょうゆラーメンを食べること。注文は1杯だけ。フローラは一口だけ食べると「後は食べて。お母さんのおなかは小さいから」とサヘルに勧めた。彼女の習い事や学費を賄うため、食費を切り詰めていた。

サヘルは凜（りん）としたフローラの行動に、いつも驚かされた。おにぎりを路上生活者に手渡したこともある。「私は今、我慢すれば明日は食べることができる。この人は明日も、あさっても我慢しなければならない」

サヘルは中学生の時、上履きを校舎の窓から捨てられるなどのいじめにあう。悲観という袋小路に入り、自殺を考えた。フローラに打ち明けると「いいよ」と意外な返事。「でもお母さんも一緒に連れて行って。サヘルがいないと生きる意味がないから」。言葉の一つ一つがサヘルの心の琴線（きんせん）に触れた。

サヘルは戦争で人生が翻弄された。一方で「フローラも私を養子にしなかったら、幸せな生活を送ったかもしれない」と呵責（かしゃく）の念にも襲われる。そうしたサヘルの心のひだを見透かしたようにフローラはやさしく諭（さと）す。「あなたは生き延びたんだよ。世界で苦しむ子の希望の光になってほしいの」。迷い、悩み、不安に押しつぶされるようになる時、サヘルは「試練という名の遠足」と前を向くようになった。

高校在学中、ラジオのリポーターをきっかけに芸能界入り。女優の傍ら、虐待された子どもや、海外の貧しい子への支援を続ける。自分の体験を通して「闇の向こうには新しい景色が広がっている。自分で地図を描けることを子どもたちに伝えたい」と訴える。フローラからのバトンを引き継ぐかのように。

フローラと一緒に暮らすサヘルは約4年前、自宅近くの空き地を借りた。フローラや近所の人と小さなバラ園（約50平方メートル）を造るためだ。毎年5月、バラの甘い香りが鼻腔（びこう）をくすぐる。フローラが付けた「サヘル・ローズ」という名前。サヘルはサハラ砂漠乾燥地帯、ローズはバラの花を指す。バラは砂漠で育ちにくい。「困難でも力強く生きて」という願いが込められている。

血はつながっていなくても、数奇な運命の糸で結ばれた2人。「これからは私が支える番」。サヘルは病気がちなフローラを気遣った。

***メモ**

2019年、サヘルはイラクを訪れた。フローラから「イラクを絶対に憎んでは駄目よ。あなたと同じような孤児がいるのだから」と言われていたからだ。イラン攻撃の最前線にいたイラクの元兵士と会った。サヘルがイランの孤児だったと伝えると、元兵士は「戦いたくて戦ったわけではない。本当に許してほしい」と涙ぐんだ。明日という日を迎えるために、武器を持ち、知らない人たちに銃を向けた元兵士の苦悩。「初めて戦争の怖さを知った」とサヘル。加害者と被害者。両者の心の傷を溶かそうと、サヘルは橋渡しの役割を担おうとしている。

（宮崎日日新聞 2021年1月16日）